おしゃれも暮らしもエンドレス

イラスト・文　本田葉子

徒然に　二月

毎年11月、結婚記念日に始めるヒヤシンスの水栽培。もう11年目に入った。十分な手入れもしていないけれど、毎年美しい根を伸ばし、ほのかな香りの花をつけてくれる。今年もちゃんと約束通り！台所の棚の上で咲いてくれた。スタートが同じでも開花日は違って、それも楽しいところだ。

もう一つ毎年の恒例としているのは、菜の花畑を見にいくこと。駅前のちょっとした山の上からは、菜の花畑の向こうに相模湾が広がり富士山も見える。なんとスカッとする風景か。冷たい風が気持ちいいと思える場所だ。途中の道には水仙の群れも。春先に先陣を切って咲くような花々が気になる。

パステルカラーの花に惹かれるように、身につけるものもカラフルに。季節につられて変化するおしゃれ、ピンクのパンツや白い靴の準備をしようか。

遠方に住む友人から「近くの駅にいるの！お茶しない？」と突然の電話。偶然にも一仕事終えてゆったり気分で外に出ていた私、20分後にはハイタッチで待ち合わせ完了だ。なんとラッキーな♪　会える時にはビックリするほどすんなりと会えるものなのね。こんなうれしい予定外がとても楽しかった。

気に入りの散歩コースの海岸は整地中で、昨年末から立ち入り禁止になっていた。やっと終了の2月半ば！久しぶりに歩くマイ海岸、これこれ、この砂！とのしのし歩いたよ。

ヒヤシンスの白色に似たワンピースを、春夏のために買った。ニットとショールなど合わせ、私も先陣を切って着ようと思う。

（隔月掲載）

ずいそう

思い出の絵本

坂本尚子（学芸員）

子ども時代は毎夏、父の故郷の沖縄に2カ月ほど滞在していました。復帰後まだ数年で米軍政下の残映が色濃く、本土との差異に驚愕する日々でした。そんな幼少時、沖縄に重ねて読んでいた絵本が2冊あります。

1冊は、『スイミー』。大きなおそろしい魚に襲われ、一匹だけ生き延びた小さな魚・スイミーが、海ですばらしい、おもしろいものに出会うたびに元気を取り戻し、怯える小さな魚たちを勇気づけ、大きな魚を追い出す策を考える展開は、復帰前の沖縄そのもの。沖縄戦後、文化や自然、教育など沖縄の価値を見出しながら復興し、米軍の圧政に抵抗。スイミーたちが大きな魚を追い出す結末のように米軍撤退を実現させたいものです。

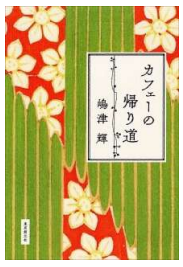
もう1冊は、『あるきだした小さな木』。在沖の親族から1978年7月に贈られたからか、ナナサンマル（730）の記憶とともにあります。この年の7月30日に沖縄の道路が、アメリカ式の右側通行から日本本土と同じ左側通行へ切り替わったのです。その瞬間の衝撃は、歩くはずのない木が自力で歩き出して旅立った！驚きさながらでした。挿絵の「ちびっこの木」が街路のガジュマルの樹に似ていることもあって魅了された作品。沖縄も「ちびっこの木」のように旅の途中、果たして安住の地を勝ち取れるのでしょうか？

訪沖のたびに移ろう光景を見ながら、望ましい未来の実現のためにどうすれば？いまなお絵本を読み返しながら問い続けています。

BOOK

カフェーの帰り道

嶋津　輝



東京創元社　1700円＋税

大正から昭和にかけ、東京・上野の片隅にある「カフェー西行」で働く女給たちの物語。竹久夢二風の化粧で人気が出るタイ子、小説家志望のセイ、くだらない嘘をつく美登里、19歳の募集を見て来る園子。彼女たちはカフェーで束の間働き、去っていく。昇降機ガールが憧れで、女性は25歳で臺が立っていると言われた時代。知を得て、世界をひろげ、人との愛を得て必死に生きる女性たちの姿が、今の私たちと重なる。第174回直木賞受賞。

異常気象の未来予測

立花義裕

ポプラ新書　920円＋税

温暖化で夏場の日本は命を脅かす酷暑が長期化し、世界の年間平均気温の上昇も止まらない。日本は四季から夏と冬の「二季の国」になったと感じている人は多いだろう。それにしてもなぜ温暖化で線状降水帯が頻発し、台風が迷走し、冬に豪雪となるのか―本書ではそんな素朴な疑問を、テレビでもおなじみの気象学者が様ざまな角度から解き明かす。人間が招いた気候危機への対策は、まず気候に関心を持つことからと呼びかける。

編集部から

〝おひとりさま〟は女性ジャーナリストが1991年に提唱した言葉だ。単身を卑下せず一人で趣味や旅行を楽しめる自立した姿勢のこと。高齢者のそれは意味合いが違うが仲間がいることは大きい。（玲）

代田知子さんおすすめの子どもの本　大人もぜひ！

講談社　1800円＋税

神の蝶、舞う果て
上橋菜穂子　文
白浜鴎　装画
（小学校高学年～）

童心社　1200円＋税

くるん　くるん
中新井純子　作・絵
（乳児～）

Gakken　1500円＋税

おもちのおやど
苅田澄子　作
植垣歩子　絵
（幼児～）

「守り人シリーズ」『獣の奏者』『香君』（共に講談社）などのハイ・ファンタジーで絶大な評価を得る上橋菜穂子の新刊がついに出た！『**神の蝶、舞う果て**』。主人公はカタゼリム（降魔士）の少年。聖域である「闇の大井戸」から舞い上がり人間の食糧となる植物に受粉する「神の蝶」を、魔物の「蝶の影」から守るのが役目だ。身体に異変を起こした相棒の少女を救おうともがく中、「聖域」の秘密が見え隠れする。切羽詰まる展開で独自の世界に引き込んでいく。かつての連載に加筆修正したもの。作者の創作の軌跡をみることができ感慨深い。

次は、０歳児から楽しめる絵本！と太鼓判を押したい『**くるん　くるん**』。まず、表紙がいい。ピンク色のクレヨン線で描かれた二重丸の真ん中で、つぶらな目をしたカオが読者をじっと見る。赤ちゃんはカオが大好き。だからじっと見返す。そこで、調子よく「くるん　くるん」と読んであげれば、もう笑顔だ。主役はクレヨン線。楽しい音と一緒に新しい形を描いていく。２～３歳児なら「ぼくも」と絵を描きたがるだろう。

最後は、絵本『**おもちのおやど**』。お餅のもーちゃんとちーちゃんが和風旅館に入ると、出迎えたのはコカブのおかみ。タクアンばあさんに「ひえひえべや」に案内されるが、ひゃ、寒い！アイスたちは氷のベッドで大喜びだが、ここはお餅向きじゃない。「ぽかぽかべや」「じめじめべや」などのユニークな設定とのんびりと味わい深い絵が、何とも楽しい。